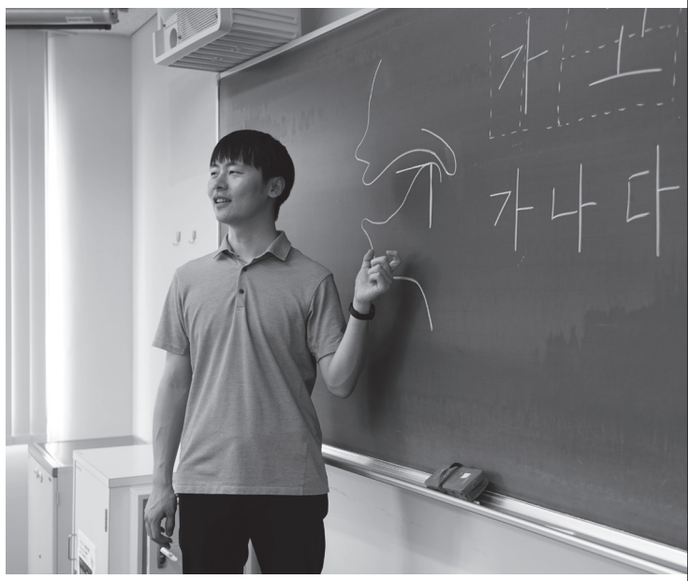
言語学者の日常はコトバのことばかり

黒島規史（言語学者）

朝、顔を洗えば「湯と熱い水」に思いをはせ、朝食では「パンもご飯である」と考え、大学で授業を行えば「飲み込む、咀嚼（そしゃく）するが理解を意味する」ことを実感し、就寝時には「閉じるのは目ではなく瞼ではないか」と疑う……。言語学者の日常をのぞけば、そのすごい思考法と言語学の魅力を目の当たりにすることに。

「湯」というか「熱い水」というか

七時のアラームが鳴る。今日も新しい一日が始まる。寝覚めの悪い私は目を覚ますために洗面所でお湯を出して顔を洗う。お湯……「湯」は英語で'hot water'で、日本語のように一語になっていない。英語は日本語とは言語のタイプも異なれば、話されている文化圏も異なるので、そのようなこともあるか、と納得するにしても、日本語と語順を含め言語のタイプが非常に似ている韓国語であっても「湯」は一語として存在せず、「熱い水」という。世界をどのように切り取り、語として表現するのかは言語ごとに違いがある。日本語では「木漏れ日」が他の言語に翻訳できない言葉として有名だが、別に翻訳ができないわけではなく、言葉を尽くせば翻訳することは可能である。ただ、いくつかの語を組み合わせた複合語（木＋漏れ（る）＋日）とはいえ、枝葉の間から漏れ差し込んでくる太陽光のことが語として存在しているという事実が珍しがられるのだろう。韓国語には水面に光が反射し揺らめく様子を表す윤슬［ユンスル］という語があり、これもまた美しい情景を一語で切り取っていると言える。そんなことを寝ぼけまなこで考えていたら一限目の授業に遅れそうな時間になってしまった。朝は一分一秒が貴重で



言語学者の日常のひとこま。熊本の大学で韓国語の授業を行う筆者。専門の記述言語学は、ある言語の音や文法を記録、分析し、体系立ててまとめる。
写真：筆者提供

ある。湯水のごとく時間を使うわけにはいかない。

私は熊本の大学で韓国語を教える教員である。専門は言語学で、特に記述言語学をやっていると説明することが多い。言語学にも様々な分野があるが、記述言語学は、ある言語の音や文法を記録、分析し、体系立ててまとめることを目的とする。ある程度記録や研究のある言語を対象とする場合もあれば、まったくといっていいほど、辞書も文法書も、はたまたそもそもその言語を書き表す文字すらない言語を扱うこともある。

私が学部生の頃から研究対象にしている韓国語は、英語には及ばないものの辞書もあれば文法書もあり、それなりに研究の蓄積もあるが、まだまだわからないことだらけである。韓国で出版された文法書の中には一五〇〇ページを超える大著もあるが、これでも足りない。文法に関する母語話者の知識は膨大である。このような韓国語の文法書に一ページ、一行でも新たな事実を書き加えられるように研究をしている、と言えばなんとなく私のやっていることがわかっていただけるだろうか。私は韓国語の記述をする際に、韓国語母語話者と話すなかで、あるいは韓国の番組やドラマなどを見るなかで疑問に思ったことを研究の出発点とすることも多い。そのように言語の観察を常としているため、どうしても普段の生活の中でも言語が気になってしまう。

UNDERSTANDING IS EATING

さて、朝の遅れを取り戻すために、急いで朝ご飯のパンを食べる。朝ご飯のパン……一見矛盾しているようだが、パンもご飯だということができる。このような上位概念（ご飯）で下位概念（パン）を、あるいは逆に下位概念で上位概念を表すメタファーを、シネクドキ、または提喩（ていゆ）という。このようなメタファーも言語研究の対象であり、特に認知言語学の分野で研究されている。メタファーと聞くと文学作品の比喩のようなものを思い浮かべるかもしれないが、我々の言語はメタファーなしには成立しない。飲み込みのはやい方はわかっただろうが、ちゃんと咀嚼して吟味しないとなかなか腑に落ちない概念なので、ぜひ鵜呑（うの）みにしないで反芻（はんすう）してほしい。どうだろうか、この一文がすでにメタファー満載である。「飲み込む」「咀嚼する」と、ここで並べた表現は全て原義が「食べる」ことにかかわるが、「理解する」というような意味に転用されている。このようなメタファーを“UNDERSTANDING IS EATING”と端的に表したりする。

他にも重要なメタファーにはメトニミー（換喩（かんゆ））がある。「ベートーヴェンを聞くのが好きだ」といった場合の「ベートーヴェン」は「ベートーヴェンの楽曲」を表している。このような隣接した概念を用いて表現するのがメトニミーだ。メトニミーを使わずに言語生活を送っている人はいないだろう。言語学はこのような現象も俎上（そじょう）に載せるのである。

雨は「降る」のか、「来る」のか、「行く」のか、「雨る」のか？

大学に向かって歩いていると雨が降り出してきた。日本語では雨が「降る」というが、韓国語では雨が「来る」という。たしかに空を見上げれば雨粒が私の方に向かって来ているとも言える。ロシア語では雨が「行く／来る（移動の方向は問わない）」といい、モンゴル語では雨が「入る」という。行ったり来たり忙しい。英語では“It rains.”というように、‘it’を主語として表さなければならない。これを形式主語という。英語は「主語＋動詞」のセットで表現する必要

この続きは本誌でどうぞ！